

日本婦道記

春三たび

山本周五郎

青空文庫

「今夜は糲摺りをかたづけしてしまおう、伊緒も手をかして呉れ」

夕食のあとだった、良人からなにげなくそう云われると、伊緒はなぜかしらにわかにか胸騒ぎのするのを覚え、思わず良人の眼を見かえした。夕方お城からさがって来たのを出迎えたときにも、いつもはそこで大剣だけをとってかの女にわたすのに、その日にかぎって自分で持ったままあがった、顔つきもなんとなく違ってみえたし、高頬のあたりにきびしい線があらわれているように感じられた。……お城でなにかあったのかしら、そういう不安が夕食のあいだもあたまから去らなかつた。そこへ常になく糲摺りを手つだえと云われたので、いよいよなにごとかあったのだと直感された。

義弟の郁之助を稽古におくりだし、姑のすぎ女と自分の食事をすませて、あとかたづけもそこそこに納屋へゆくと、良人はもうひとりで臼をまわしていた。燈油の燃ゆる匂いと、脱穀する粃の香ばしいかおりとがまじり合つて、納屋の中はあまく噓つぽい匂いでいっぱいだった。

「おそくなりまして……」と云つてすぐに俵へかかろうとしたが、伝四郎は白をとめながら、「まあ待て、少しはなしたいことがある」とふりかえった。

「その戸を閉めて、ここへ来てかけよう」

自分からさきに藁束わらたばを置きなおして腰をかけ、伊緒にも席を与えた。低い天井から吊つてある燈皿のあかりが、じいじいと音をたてながら、ふたりの上からやわらかい光をなげていた。

「おまえも聞いたであろう」

と伝四郎は低いこえで話した。「肥前のくに天草に暴徒が乱をおこし、内膳正（板倉重昌）さま、将監（石谷十蔵）さまが征討軍の大將として出陣なすった、それはさる十日のことだったが、このたび総督として松平伊豆守（信綱）さまとわれらがご主君（戸田氏鍊うしかね）のおふた方が御発向ときまった。今日そのお使者が江戸おもてから到着し、すぐに陣ぞろえがあつたのだ」

「そのお供をあそばすのでございますね」

伊緒はやつぱり予感が当たったと思い、われ知らず声はずませた。伝四郎はうなずいて、「番がしらの格別のおはからいで、留守にまわるべきところをお供がかなった、世が泰平

となり、もはや望みなしと思つていた晴れの戦場へ出られる、きむらいとしての冥加みょうがは申すまでもない、おれは身命を棄てて存分にはたらくつもりだ、そしてもし武運にめぐまれ万一にも凱陣がいじんすることができたなら、必ず和地の家名をあげ、おまえにもいくらかましな世を見せてやれると思う。しかし今のおれには少しも生きてかえる心はない、めぐましく戦つて討死をするかくごだ、それについて伊緒

「……………」

「おまえに約束してもらうことがある」伊緒は不安げな眼をあげて良人をふり仰いだ、伝四郎は妻の顔をじつと見まもりながら、「おまえは和地へ嫁してきてまだ三十日に足らない、おれが討死したら、そしてもしまだ身籠みもつていなかったら、離別して実家へもどつてほしい、和地には郁之助という跡取りがいる、おまえがやもめをとおす意味はないのだ」伊緒はかたく唇をつぐんだままじつと聞いている、伝四郎は考えていることを的確に云いあらわす言葉に苦しむようすで、ちよつと片手をあげてうち払つた。

「二夫にまみえずということもあるが、家名を継ぐ者のいる家に、むなしく一生を埋める要はない、操をまもるのも女の道には違いないけれども、よき子を生んで世に出すことはもつと大切だ。操をたてる、たてぬはそのかたちではなく心ぎまにある、かたちにとらわ

れて道の本義をうしなつてはならない、……うまく言葉がつかないけれども、おれの
いう道理はわかるだろう」

はいと伊緒は良人をふり仰いだまうなずいた。きつと一言で承知すまいと考えていた
伝四郎は、あまりすなおに妻がはいと肯いたので、かえつて疑わしくなった。

「本当にわかつたのか、約束して呉れるか」

「……はい」

お約束いたしますと伊緒は口のうちに答えた、少しもくもりのない澄んだまなざしだつ
た。伝四郎はいくらか安堵あんどしたようすで、「それで安心した、母上に申上げる前にこのこ
とを約束しておきたかつたのだ、玄蕃どのへは今日もどりがけに話してきたからな」

「いつ御出陣でございますか」

「殿さまには二十七日に江戸おもてを御出馬だそうだ、ここまで五日とみて、六七日には
出陣かと思う」

「では糶摺りなどよりその御用意がさきでございます」

「いや用意というほどのことはない、太刀、槍ひとすじ、具足を出せばそれでよいのだ、
それよりも」と伝四郎は膝ひざを打つて立ちあがった、「御上納の分だけでもかたづけして置こ

う、おれが出てしまうといろいろ手ぶそくになるからな」

そしてふたたび石臼をひきはじめた。

伊緒はそばにいて、つつましく手だすけをしながら、ときどきそつと良人の横顔へ眼をあげた。すると面ながの、眉の濃い、しんのきつそうな良人の顔が、どういうわけか今はじめて見るように思え、それがいかにもめおとの縁の浅いことを証拠だてるようで堪らなくかなしかつた、石臼はごろごろと重い音をたてて廻っていた。

二

伊緒は十七歳だった。美濃のくに大垣藩の戸田家で、徒士ぐみ番がしらを勤める林八郎右衛門のむすめに生れ、正之進という兄と、伊四郎という弟があった。かの女はみめかたちのおそろい、美しいうまれつきで、十四五になるともう諸方から縁談がおこり、ぜひと望んでくるかなりな権門もあった、けれども八郎右衛門は頑固に頭を振りつづけた、「みめかたちで望まれるものは、やがてまたみめかたちで疎んじられる、容貌はすぐに衰えるもので、そのような不たしかなものに眼をつけるのは、たのみがたい相手だ」そういう父の

言葉をいくたびも聞くうちに、伊緒は、ひところ自分の美しいうまれつきを恥かしくさえ思ったほどであった。八郎右衛門はかの女が十七歳の誕生を迎えると、かねて眼をつけていたもののように和地伝四郎へ縁づけたのであった。

家中の人々は眼をみはった、和地は二十石あまりの徒士だったし、さしてぬきんでたひとがらでもない、老母と病身の弟があつて家計も貧しく、御恩田を耕してほそぼそとくらしていた。御恩田というのは藩主戸田氏鍔が設けたもので、城下近くの荒地をひろく開墾し、そこで微禄の士たちに農耕をさせるのである。出来たものなりは五分を上納するだけで、あとは自分のものになる定めだったから扶持ふちのすくない者にとつてはありがたい恩典だった。もちろんそれは単に微禄の士を救きゆうじゆつ恤じゆつするというだけではなく、武と農とを合致させることによつて質実の風をやしなう意味もあつたのであるが、しかし一般には「御恩田持ち」というと軽くみられるのが避けられない事実であつた、伊緒の父八郎右衛門はその軽薄な眼をおどろかしたのである。輿こしい入れをするまえ八郎右衛門はむすめに向つて諄じゆん々ゆんじゆんと説いた。——武士だから扶持を頂いておればよいということはない、泰平になれば御奉公にもいとまがある、太刀をもつ手に鋏くわをとるのもさむらいの道だ、いにしえはみなそうだった、鋏をにぎつて五穀を作り、太刀をとつては国をまもる、これが古武士のす

がただった、そしてそういう生きかたのなかにこそ道のまことが伝わるのだ、よいか、これも篤^{とく}と心得ておけ。伊緒には父の気持がよくわかった、父はかの女に栄達をさせようと考へなかつた、安樂な生涯をと望まなかつた、まことの道にそつて、おのれのちからで積みあげてゆく人生を与えてくれようとしたのだ。

和地家へ嫁してきて、生れてはじめて農事に手をつけたとき、だから伊緒はかえつて生き甲斐^{がい}をさえ感じた、——すべてはこれからだ。そういう気がした、これからすべてを良人とふたりして築きあげてゆくのだ、そういう実感のたしかさが、十七歳のかの女にはいかにもちから強く、新鮮に思えた。……そして二十余日、まだ「妻」という言葉さえしきとは身につかぬうち、良人は晴れの戦場にめぐまれて出陣することになったのである。

戸田氏鏝が大垣へかえたのは十二月二日だった。陣ぞろえはできていた、左衛門氏鏝をはじめその子淡路守氏経、二男三郎四郎、老臣では大高金右衛門、戸田治郎右衛門、そして騎馬徒士とも二千余人である、和地伝四郎も人数にはいつていたし、伊緒の実家でも兄と弟がお供に召された。父は痼疾^{こしつ}の胃がひどく悪くて動けず、泣いて無念がつたということを伊緒はあとで聞いた。義弟の郁之助も泣いたひとりだった。

「では留守をたのむぞ」

そう云つて伝四郎が出ていったとき、伊緒と共にかれは表まで送つてゆき、そこに立つたままぼろぼろと涙をこぼして泣いた。

「残念だ、こんなからだなら、いつそ生れてこないほうがましだった」

口惜しそうに呟きながらいつまでもそこで泣いていた。伊緒はそれを聞くとしめつけられるようにいたわしくなり、いっしょに面を掩おほつて泣いた、そして泣きながらはげしく叱つた。

「なんとというめめしいことを仰しやるのです、戦場へゆくばかりがさむらいですか、からだが丈夫で武術にも達していて、それでも留守城へお残りなさるかたがたくさんあります、ここにも御奉公の道はあるはずでしょう、兄上さまに万一のことがあれば、あなたは和地の家を継ぐべきひとなのですよ、そんなめめしいことは二度と仰おつしやつてはいけません」

「あね上にはおわかりにならない」郁之助は叫ぶように云つた、「留守の番として残ると病弱でお役にたたないのとはことが違います、けれどそれは、申上げてもおわかりにならない」

そして腕で面を押えながら、逃げるように家のなかに走り去つた、かれは伊緒よりひとつ下の十六歳であつた。

良人が出陣していった翌日から雪が降り出した。こまかな、かわいた雪が、さらさらと一日じゆう降り、夜になってやんだとおもうと、あくる朝はもつとひどくなり、それから三日のあいだ小歇こやみもなく降りつづけた。その雪のなかで、とつぜん父が死んだ、戦場におくれた落胆がこたえたのか、知らぬまに痼疾がそこまですすんでいたものか、ひどくあつけない、朽木の折れるような死だった。迎えをうけて伊緒が実家へはせつけたとき、八郎右衛門はもうかの女をみわけることさえできなかつたのである。

「もつとはやく知らせたかつたけれど」と母はまだ夢でもみているような、とぼんとした表情でそう云った、「普通するときではない、良人が戦場へいった留守なのだから、息をひきとるまでは知らせてはならぬ、そう仰しやつてどうしてもおききにならなかつたのでねえ」

通夜もさせてはならぬという遺言だった。そして短刀に添えて、おおぞらをてりゆく月しきよければ雲かくすともひかりけなくに、という古今集の尼敬信の歌をぬき書きして、

「このころ忘るべからず」としるした尺牘せきとくをのこしていつて呉れた。伊緒は父のころがよくわかるので、一刻ときほど遺骸とぎの伽とぎをしただけで、かたみの品を抱いて雪のなかを帰つて来た。

季節は寒に入った、雪のあとは、空気までがぱりぱりとしそうな凍てで、城下とその杭瀬川は陽ざかりにも張りつめた氷の溶けきれぬようなことが多かった。伊緒は襷たすきをとるとまもなかつた、御上納の米を俵たわにしてだし、売る分の粃摺こめつりをし、米搗たぎき、焚木たぎとり、むしろ編み、縄なひない、そして蔬菜畑そさいばたけのせわなど、農家から賃ちんぎめで手つだいにくる老人を相手に、休むひまもなくはたらきとおした。郁之助は雪のあとで風邪をひき、稽古きこもやめてこもつていたが、姑こわのすぎ女は丈夫なので、「そうひとりでもなにもかもおやりでは、からだを毀こわしてしまいますよ」と云い、せめて炊事や針はりしごとだけでも自分が代しろろうといつたけれども、伊緒はいきいきと血のけの張はりつた頬ほで笑わらいながら、「旦那さまはいま命を賭として戦いくさつていらつしやいますもの」と答え、なにひとつ姑しゅうとめの手を煩わづらわそうとはしなかつた。年があけて十三日の日に、島原へ着陣しやくじんしたという知らせの使者が留守城へ来た、ひと揉もみと思つていた賊徒ぞくとがなかなか頑強がんきやうで、元旦の城攻めには主將の板倉重昌が討死うちじをしたということも、その使者の知らせでわかつた。——内膳正うちぜんまどのが討死うちじをなすつた。それは

留守城の人々をひどくびつくりさせた、征討軍の大將が戦死をするとはどのようなげしい戦だったであろう。——これはなみたいていのことではない、おそらく家中からも相当に損害がでるぞ。そういう噂うわさが口から口へ伝わり、にわかには城下のようなすが緊張してきた、伊緒もその話を聞いて、はじめて戦場というものがじかに感じられ、「どうぞ御武運めでたく」と心をこめて祈りながら熟睡のできない幾夜かをおくった。もちろん生きてかえれどたのむのではない、生死いずれとも武運にめぐまれてほしいという気持である。伝四郎はつねづね御恩田持ちという身の上を妻に対してひげめに感じている風だった、世間にむかつてはむしろ誇りさえしていたのに、妻にだけはなぜかしらん気のどくそうだった。伊緒にはそれが辛かった、たとえ良人が立身しても御恩田は放すまい、かの女はひそかにそう誓っていた、自分にひげめを感じている良人がうらめしくさえあった。だから、良人が武運にめぐまれて呉れたら、そんな無用なひげめは感じなくとも済むようになろう、それが伊緒のねが이었다。

郁之助はその後いちどなおって稽古へ出たが、それでまた風邪をひきかえし、こんどは発熱と頑固な咳せきにくるしめられて床についてしまった、伊緒の手はいそがしくなるばかりだった、夜を徹することも幾たびかあった、しかしこのあいだに季候はいつかゆるみはじ

め、思いだしたように降る雪もしめりけが多くて、積るとまもなく消えるようになった。野づらの残雪が知らぬまに溶け去ると、堤の日だまりや田の畔くろにちらちらと青みがさしはじめ、杭瀬川はとくとくと水みずかさ嵩を増した、そしてある日、狂ったように東南の暖かい風が吹き荒れたあと、まるでその風がはこんで来たもののように春がおとずれた。

二月になってから苦戦を報ずるばかりだった島原からは、「包围陣になった」と知らせてきたまましばらく沙汰を絶っていたが、三月二日、賊徒とのあいだに激戦のはじまったという使者が来、追いかけて六日には、「二月二十七日原城陥つ、賊徒誅に伏す」という捷しょうほう報が到着した。その知らせを聞いてから、かえって伊緒は心のおちつきをなくし、どうかすると居ても立ってもいらぬほど不安な気持ちに駆られた。十八日になると死傷者の記名が届いた、思いのほか損傷はすくなく、死者は内藤九右衛門、成川一郎兵衛、酒井源右衛門、森伝兵衛の四人、負傷者は村井五郎左衛門以下三十余人にすぎなかった。記名書は和地家へもまわされた、伊緒は姑といっしょに読んだのだが気があがって文字がよくわからず、どこにも良人の名のないことをたしかめるまでには三度も読みかえさなければならなかった。

「伝四郎どのはごぶじのようですね」そういう姑の声も心なしかふるえていた、答えよう

としたが喉がつかえた、それで伊緒は病床にいる郁之助にみせるためにいそいで立っていた。

四

将兵が大垣へ凱旋したのは五月八日のことだった。藩主の戸田父子はそのまま江戸へくだったので表むきの祝宴はなかったが、侍屋敷はどきもかしこも歡びにわきたっていた。けれども、そのなかで和地の家だけはひっそりと音をひそめていた、負傷者の家でも、戦死者の家でさえも、この一家ほどしめやかに沈黙してはいなかった。

思いもかけぬ恐ろしい結果が和地の家族をうちのめしていた、それは伝四郎が帰らなかつたのである、死傷者の記名にもその名はなかつたし、凱陣した人数のなかにもいない、しかも不幸はそれだけでなく、そのことについて聞くも忌わしい噂がひとの口に伝わっていたのだ。

「二月二十七日の総攻めに城へ踏みこむまでは見た者もある、それからさきは誰にもわからない、まったくゆくえ不明なのだ」番がしらはそう説明した、「城は焼け落ちたので、

死した躰たいはずいぶん念いりに捜してみたが、みつからなかった、せめて遺品のはしきれでもあれば、……なんとか討死ということにもできたのだが」

おなじ隊で戦った人たちも同様のことしか云わなかった、そしてもつと堪えがたかったのは、……伝四郎は戦場から逃げたらしいという評判がひろまったことだった。どうしてそんな評判がひろまったのか、どこから出たのか、つきつめてゆくと根拠はなかった、けれどもいちど口の端にのぼった噂はどうしようもない、あまりの意外さ、あまりの口惜しさに、伊緒はあたまが昏こんらん乱して考えるちからも失ってしまった。姑のすぎ女は日ねもす部屋の隅でじつと息をころしていたし、郁之助は病床にきらぎらと眼を光らせていた、そしてときどき血を吐くほどもはげしく咳きこんだ。

暗澹あんたんとした息ぐるしい日がつづいた、そしてある日、槍ぐみ番がしらの平田玄蕃と実家の兄の正之進とがおとずれて来た。玄蕃は伝四郎と伊緒とのなかだちをした人である、ふたりの顔を見たとき伊緒はすぐに用向がなんであるかを察した、けれど眉も動かさなかつた。

「今日のご内意をうかがいに来たのだが……」姑とのあいだに挨拶が済むと、玄蕃があらたまつた調子で云いだした、「天草へ出陣のおり伝四郎どのからお話があった、もしも伝

四郎どのが帰らなかつた場合には、嫁して日も浅し、家には跡取りもいることゆえ伊緒ど
のを実家へもどしたい、母も当人も承知であるそう云われたがご承知であろうか」

「はいたしかに承知しております」すぎ女はおちついて答えた、「このうえもないよい嫁
女で、わたくしのほうから離別などとは申しかねますけれど、仰せのとおり伝四郎と祝言
を致しまして三十日足らず、家には跡を継ぐべき郁之助もおりますことゆえ、嫁女の名に
瑾きずのつかぬようおひきとり下さいましたら、双方のしあわせと存じます」

「それをうかがつて安堵した」玄蕃は本当に肩の荷をおろしたというようすだった、「な
ろうことなら一年もしてと思うが、伝四郎どのについてあらぬ評判もあるおりから、林ど
の御一族のご都合もあらうと考える、今日はこれだけの話でおいとま申すが、いずれ近日
うちに日どりをきめてご相談にまいりましょう」

「なにごともおまかせ申します、どうぞよろしくおはからい下さいませよう」

すぎ女がそう会釈を返したとき、はじめて伊緒が、「お待ち下さいませ」としずかに云
つた、「わたくしそのお話はいやでございます」

「……………」

玄蕃も兄の正之進もふいをつかれておどろいたようにふりかえつた、伊緒はふたりの顔

をきつと見すえ、ちからのあるはつきりとした口調でつづけた。

「こなたさまはいま伝四郎にあらぬ噂があると仰せられました、いやと申上げるまえにそれをうかがいたいと存じます、あらぬ噂とはどのような噂でございませうか」

「伊緒なにを申す、ひかえておらぬか」正之進がきひしく制止した、するとかの女は兄のほうへ向きなおり、「では兄上にうかがいます、あらぬ噂とは伝四郎が戦場から逃げたということ指しておいでなのでございませう、それならわたくしも耳にしております」

そう云いかけて伊緒はさつと蒼あおくなつた、膝の上にかさねた手がわなわなと震えた、かの女は抑えに抑えていた口惜しさがどつと胸へつきあげ、云いかえしたい言葉がいちどに喉へ溢れだすのをどうしようもなかつた。

「けれどその噂はたしかなものでしょうか」伊緒はひたと兄の眼をみつめながら云つた、「死躰のみあたらぬということが、どのような事実の上にあるのか存じませぬ、またわたくしは女のことゆえ戦場のありさまもしかと判断はできません、でも兄上……合戦というものは、お馬場うちで武者押しをするのとは違うものではございませぬか、敵も味方も必死を期して、城壘を崩し矢倉を焼き、ここを先途と戦うばあい、崩れる土石に埋められる者はございませぬか、焼け落ちる城郭の中で骨ものこさず灰になる者はございませぬか、

そのような者は決してないと仰しやることができますか」

「……………」

「おそらくそのような事は稀まれでございましょう」伊緒はけんめいに昂たかぶる声を抑えながらつぶけた、「けれど稀ではあっても、無いことではないと存じます、それが戦だと存じます」

それが戦だと思うと云いきつた伊緒の言葉に、玄蕃も正之進もわれ知らず眼を伏せた。伊緒の蒼ざめた頬にそのとき美しく血みなぎが漲り、眉があがって、平常とはまるで見ちがえるような、つよい仮借のない凜りんれつ烈な表情を示したそしてやがてこんどは玄蕃のほうへむかつて、

「この家に跡取りがあるという仰せですけれど、郁之助さまはあのような御病身で、不吉なことを申すようですが家名を立てとおせるかどうかわかりません、まして良人の生死がわからぬというではございませんか、和地の家を立ててゆき、姑上さまのゆくすえをおみとり申すのは伊緒のやくめでございます、どうぞそうおぼしめして、ふたたびかようなお話はご無用にねがいます」

それだけ云うと、かの女はしずかに立って次の間へ去った、そして、はじめて両手で面

を掩いながら噎びあげた。

まだまだ云いたりない、もつともつと云つてやりたい、そう思うけれども伊緒はまだ若く、それ以上にはどう云いあらわす術も知らなかつたのである。

「……あね上」部屋のむこうにのべてある病床から、郁之助がすがりつくような声で呼びかけた、片頬がびつしよりと涙で濡れている、かれは半身をおこし、感動を抑えつけるようにうちふるえながら云つた、「よく仰しやつて下さいましたあね上、ありがとうございますました」

五

「本当をいうとわたしは、あね上を憎んでいたのです」郁之助はその夜そう云つた、「あの話はわたしも兄上から聞いていました、それでいつかは、あね上はこの家から去つておいでなさる、そう思つていたんです、だつてあね上はそうお約束をなすつたのでしょうか」「ええお約束をしました」伊緒はかなしげに微笑しながら答えた、「それは初めから実家へもどるつもりなど無かつたからです、お言葉をかえすのもわざとらしく思えました、そ

れでただはいとだけ申上げていたのです」

「わたくしはそう思わなかったものだから……」と郁之助は眼をつむりながら、遠くの人にも云うようにそつと呟いた、「おゆるし下さいあね上、今日までずいぶん意地の悪いことばかりしていました、これからは改めます、そして……」

「強くなりましょう郁之助さま」伊緒はうなずきながら云った、「わたくしにお詫わびをなさるようなことはございません、それよりも強くなることを考えましょう、あなたも、わたくしも、……そして和地の家をりっぱにまもりとおしてゆきましょう」

「でもあね上……」郁之助は、ふつとあによめをふり仰いだ、「あんなことになって和地の家名が続くでしょうか、このままおいとまになるのではないでしょうか」

「旦那さまは討死をなすつたのですよ」伊緒はうち消すように云った、「わたくしはそう信じています、めざましくお戦いになって、誰にも劣らぬりっぱな討死をなすつたに違いないでございます、それだけのお覚悟があつたのをわたくしだけは知っていますのですもの」

出陣のまえに納屋で話し合った時の良人の気持を、云えるものなら云って聞かせたい、けれど良人と妻だけの機微な心のかよいはわかつて貰えないであろう、かの女はそう考えたのでしずかに座を立った。

伊緒はすぐにもどつて来た、そして父がかたみに遺していつて呉れた尺牘せきとくをひろげて、これを読んでごらんさいと郁之助の手へわたした。かれはしばらくそれを黙読していたが、やがて低いこえで、「おおぞらをてりゆく月しきよければ雲かくすともひかりけなくに……」とくりかえし唱した。

「それは亡くなった父が遺して呉れたものです、わたくしの心得のために撰んで呉れたものですけれど、いまの和地家にも当てはまると思います、その古歌のころを忘れずに、強くりつぱに生きてまいりましょう」

「あね上」郁之助は双眸を火のように輝かせながら云った、「郁之助は強くなります、からだも、心も、きつと強くなります、石にかじりついても……」

伊緒は義弟のはげしい眼をみつめ、無言の誓を交わすように幾たびもうなずいた。

ぎりぎりまで追いつめられたところから、かえつて伊緒はしっかりとたちなおった、美しくすぐれたみめかたちに似つかわしいたおやかな従順さのなかから、今や「どこまでも生きぬいてゆこう」とする烈しいちからが生れたのである。ひっそりと音をひそめていた和地の家が、久方ぶりで、からりと戸障子を明け放つかのようになみた、伊緒がふたたびまめまめとはたらきだしたのである、手つだいの老農夫を相手に麦をとりいれ、苗代をか

いた。梅雨にいり、炎暑がめぐつてくると、野良しごとは十二刻を倍にしたいほど忙しくなる、郁之助はどうやら床を離れたが、自分のことをするのが精いっぱいであらためて凱旋の祝宴が催され、また天草陣の恩賞がとりおこなわれた。けれどもそれは和地家にはかわりのないことだ。一家の柱を表象するような、日に焦けた手足を惜しげもなくさらして、伊緒は昼も夜もなくはたらきとおした。

年があけて梅の咲きはじめる頃、郁之助はころみに剣道の稽古に出てみた、具合がよかったので休み休みつづけたが、桜の時分になって風邪をひきこんだのが、なかなかよくなり、あせるほどこじれるばかりで、ついにまた床についてしまい、さらにその年のはげしい暑さにあつて医者も首をかしげるほど衰弱してしまった。その前後から伊緒に婿をとるはなしが出はじめた。平田玄蕃がはじめにその相談に来た、実家の親族の者もしばしば来ては姑と会った、——郁之助どのに万一のことがあると家が絶える、伊緒はまだ二十まえだし、これに婿をとつて家督をきめておくのがよくはないか、さいわい二三のぞむ者もあるから。そういう話もあったが、伊緒はまったく無関心のようにだった、あるときまた玄蕃がおとずれて来て、姑としばらく話し合ったのちかの女が呼ばれた。はなしは姑が

した、そして玄蕃が親族の意見をそばからつけ加えた、伊緒は黙って聞いていたが、ふたりの話が終るとしずかに玄蕃にむかつて問いかえした。

「おはなしはよくわかりました、それで伝四郎のことはどうなるのでございますか」

「伝四郎どののことは……」

「天草陣にてゆくえ知れず、生死のほどもわからぬということではございませんか、良人の生死がわからぬのに、妻が後夫をとるといふ話がございますか」玄蕃ははたと言葉につまった、伊緒はこみあげてくる感情を抑えながら、「そのことがはつきり致しましてからなれば、どのようなおはなしもまた承わりますよう、それまではご無用にお願い申します」

そういつて座をしりぞいてしまった。

六

その年の秋から冬へかけては、まるで試練のような有様だった。二百十日まえに暴風雨があつて、稲が吹き倒されると、そこへ追っかけて洪水がきた、もともと大垣の付近は水

害にみまわれることが多く、城そのものも輪中（河川の氾濫を防ぐために周囲へ郭をつくったもの）にあるほどで、いちど洪水となると被害はさんたんたるものになる。和地家の御恩田も風で吹き倒されたところへ水をかぶり、その年はついに一粒の収穫もなしに終わった、また郁之助はだんだんと衰弱が増すばかりで、医薬の費えだけでも分に過ぎた重荷だった、それで僅かでもその費えを助けようと、伊緒は夜仕事に紙漉きのわざをならい、凍てる夜な夜な、水槽の氷を破つてしごとをはげんだ。

また年があけて、重態のまま郁之助は春を迎えた。そして二月二十五日に、久しくみえなかつた平田玄蕃がおとずれて来た、これまでのようすとは違って、なにやらはればれとした顔つきをしていた。

「今日は吉報をもつてまいりました」かれは挨拶もそこそこに、そう云つて伊緒をその座へまねいた、「お上のおぼしめしで、この二十七日に天草陣で討死をした者の三年忌の法会がとりおこなわれる、それに当つて和地伝四郎どのもあらためて討死ということにきまり、軍鑑に記されたうえ食禄御加増の御沙汰が出た」

ふいにさつと、この家の内を眼にみえぬ戦慄がはしりすぎたようだった、すぎ女も伊緒も膝の上で手をぶるぶると震わせ、隣りの部屋からわつと郁之助の泣きだす声が聞えた。

玄蕃はつづけて云った。

「また二十七日の法会には、御菩提寺ごぼだいじにおいて家族におめみえのおゆるしがある、当日は案内があると思うが、御老母にもそのつもりで支度をして置かれるがよい」

「かたじけのう存じます……」

そう云うのがようやくのことで、すぎ女もついに両手で面を掩った。伊緒は泣かなかつた、はじめくらくらとめまいを感じたが、それが鎮まると立って行って、戸袋の中から良人の位牌いはいをとりだし、まさしく仏壇に安置して燈明と香をあげた。そしてその前へしずかに手をつき、生きている人にでも云うようにはつきりと云った。

「旦那さま、お聞きのとおりでございます、お討死ということがきまり、軍鑑にも記されましたと……これで御成仏あそばしましょう、わたくしもうれしゅう存じます」

ながいあいだ戸袋の暗がりであつて、ひそかに香華の手向けをしてきた位牌だった、それがいま暗がりから出るときが来たのだ、今こそ世の光をあびることができなのだ。

玄蕃もそつと眼を押しぬぐっていたが、やがてすぎ女にむかつて云いだした。

「うちあけて申すが、これは伊緒どののお手柄です、さきごろお上の御意で洪水の被害のおとりしらべがあつた、特に貧困の者には御憐愍ごれんびんのお沙汰があるとのことで、精しくし

らべあげた調書のなかに、この家のことも書かれてあった、こなたはむろん知るまいが、伊緒どのの評判は、かねてお上の耳にも達していたとみえ、伝四郎どの討死のことをあらためて吟味せよという仰せが出た、……軍目付、組がしら、槍奉行、その他の合議が幾たびとなく繰り返され、さいごにお上の御裁決をもって討死ということにきまったのだ、これは伊緒どののまことが徹つたと申すほかはなく、なこうど役のそれがしなども、ただただ肩身のひろいおもいが致します」

そしてさらに附け加えて、和地家の跡目をきめよという上意があつたといひ、伝四郎の討死がきまつた以上は、伊緒への婿のはなしを考えてもよいであろうとすすめた。

姑がどう答えたかは聞かなかつた、伊緒はそつと郁之助の枕もとへいつて坐つた。待ちかねていたようにかねはあによめを眼で迎え、泣きながら笑つていた。

「これで郁之助は死ねます」そう云つてかれは、つと手をのべて伊緒の手を求めた、「みんなあね上のおかげです、言葉には云えませんが、お礼は申上げませんが、わたしは今日まで命のあつたことをうれしいと思ひます、兄上に土産が持つてゆかれますもの……もう心のこりはありません、いつでも死ねます、もうすつかり安心です、母と和地の家をおたのみしますよ」

「運がめぐつて来たのですよ郁之助さま、あなたもきつとおなおりなさいます、きつと、きつと。そうでなければ、今日までのわたくしの苦勞が、水の泡あわになってしまふではありませんか」

「そうです……なほなければ申しわけがありません、けれど……」

「さあ元氣をお出しになつて」と伊緒は義弟の瘦やせほそつた手を握りしめながら云つた、

「これからなにもかもよくなるのです、和地の家もわたくしが婿をとることはありません、養子をすれば家名は立ちます、あとは郁之助さまがお丈夫になるだけですよ、それですから納まるんです。いつかのお約束をもういちど致しましょう、強くなるんです、石にかじりついても……」

「石にかじりついても、あね上」

玄蕃が帰つたのであろう、仏壇の鐘を鳴らしながら、姑の低く誦ずきよう經するこえが聞えてきた。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1943（昭和18）年4月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

春三たび

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>